

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 第10回 全国大会プログラム

日 時 2010年11月20日(土) 10:00~17:50
場 所 名古屋大学 情報文化学部 (全学教育棟)
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL:052(789)4864(松岡研究室)
(地下鉄名城線 名古屋大学駅徒歩1分)

(S30教室)

- ★総合司会 日本大学教授 原 公章
★会長挨拶 (10:00~10:05) 南山大学名誉教授 荻野 昌利
★研究発表 (10:10~11:40)

第一室 (C33教室)

- 司会 中京大学教授 武井 暁子
1. 19世紀中葉イギリスのホメオパシーにみる医療の権威 明治大学助手 黒崎 周一
司会 筑波大学大学院准教授 中田 元子
2. 視覚化への欲望——観光と文学 静岡産業大学准教授 岡谷 慶子
3. オリентへの揺れるまなざし
——イザベラ・バードのアジア紀行をめぐって プール学院大学准教授 大田垣 裕子

第二室 (C34教室)

- 司会 岐阜聖徳学園大学教授 角田 信恵
1. 外面の美学としての衣装 ——『ウィングミア卿夫人の扇』における
アイリーン夫人の衣装の考察 名古屋大学大学院 森 彩香
司会 日本女子大学教授 川端 康雄
2. ウィリアム・モリスの中世主義受容 神戸大学大学院 清川 祥恵
3. ジョン・ラスキンの女子教育
——マーガレット・ベルのウィニントン・ホールを中心に 日本女子大学講師 升井 裕子

(C36教室)

- ★理事会 (11:50~12:50) 司会 武庫川女子大学教授 玉井 暉

(S30教室)

- ★総会 (13:00~13:30) 司会 福島大学教授 辻 みどり
★特別研究発表 (13:40~14:40) 司会 中央大学教授 新井 潤美
「ヴィクトリア朝建築の詩学——桂冠詩人が守った街並み」
名古屋大学大学院准教授 大石 和欣

- ★シンポジウム (15:00~17:30)

「ヴィクトリア朝イギリスと開国日本——文化交流のはじまり」

- 司会・パネリスト 大手前大学名誉教授 松村 昌家
パネリスト 筑波大学大学院准教授 山口 恵里子
パネリスト 大阪大学大学院准教授 橋本 順光
パネリスト 名古屋大学大学院教授 福田 真人

- ★閉会の挨拶 (17:30~17:40) 甲南大学教授 井野瀬 久美恵

- ★懇親会 (18:00~20:00) 会場 南部厚生会館 (南部食堂 二階「彩」)
司会 中京大学教授 岩田 託子

【研究発表】

19世紀中葉イギリスのホメオパシーにみる医療の権威

明治大学助手 黒崎周一

19世紀中葉のイギリスでは、医師の専門職化が進む一方で、既存の正統医療とは異なる、独自の理論を掲げたオルタナティブ医療が支持を広げつつあった。従来の研究は、オルタナティブ医療と正統医療との対立を強調し、前者を社会の周縁に位置づけることが多く、特にホメオパシーと呼ばれる一派は、理論面の独自性に加え、支持者による組織化の進展もあって、正統医療との対立がより強調され、一層周縁化されていたと指摘されている。これに対し本報告では、ホメオパシー医たちの普及活動について、当時の医療で重要な位置を占めていたチャリティと結びつけて考察する。そして医師のみならず、地域住民の視点からみたホメオパシーの社会的位置を再検討し、「医」の権威を確立する上で、学問上の優越性を主張するだけでなく、地域住民の支持を得る必要があったという点で、正統医療とオルタナティブ医療との間に大きな差異はなかったことを明らかにする。

視覚化への欲望——観光と文学

静岡産業大学准教授 岡谷慶子

19世紀に鉄道や客船の交通手段が発達すると、トーマス・クックの旅行の産業化も加わって、「文学巡礼」が流行となった。A&C ブラック出版社はピルグリム・シリーズと銘打って文学作品の作者や作品のゆかりの地を図説した『スコット・カントリー』『ディケンズ・カントリー』などを出して人気を博し、旅行者向けの携帯版のテキストも売った。クック社は客が旅行の予習ができるように読書リストを提供し、営業に利用した。クック社はまた日帰りでアボッツフォード・ハウス、墓のあるドライバラ寺院、『最後の吟遊詩人の歌』ゆかりのメルローズ寺院をめぐるコースやエディンバラ発バーンズの生誕地エア行きのコースを毎日用意していた。プロンテ協会は記念館の整備に着手し、収集品で手狭になった頃、運良く売りに出された牧師館を譲渡された。19世紀のツーリズムは出版業とタイアップして、今よりもっと文学に依存するところが大きかった。

オリエントへの揺れるまなざし——イザベラ・バードのアジア紀行をめぐる

プール学院大学准教授 大田垣裕子

『日本奥地紀行』の著者であるイザベラ・バードは世界各地をめぐる見聞を広めたレディ・トラベラーの一人であった。本発表では主としてバードのアジア紀行を取り上げ、そのアジア的事象に関する細やかで鋭い観察記述の中にそれらに対する彼女の矛盾する視点の混在、すなわちアルカディアとしての東洋への幻想とアジアの国々の宗教や文化に対する否定的解釈が読み取れることを明らかにする。美しい自然と調和した生活を送る人々に対する差別的な表現には帝国主義的な未開と文明の二項対立的な捉え方が根底にあることを否めない。

しかしながらバードはまた『マレー半島紀行』その他で時折「誰もが性急で不的確な判断や結論を下す危険性があることを痛感しています」と綴っている。その自戒の言葉はポストコロニアル時代に生きる私たちに自らの異文化理解を常に客観的に吟味し直すことを迫っているように思われる。

外面の美学としての衣装——『ウィンダミア卿夫人の扇』におけるアイリーン夫人の衣装の考察

名古屋大学大学院 森彩香

オスカー・ワイルドにおける美は、『嘘の衰退』によれば自然の模写から生まれるものではなく、芸術によって提供される自然という技巧的な美である。そして、『ウィンダミア卿夫人の扇』におけるアイリー

ン夫人は美しく着飾った女性の勝利を示している。夫人は外面の美にこだわる人物だが、その仮面の内側には何も無い。ワイルドにとっての衣装とは単に流行を追うものではなく、オクスフォード運動によって生まれた儀式への関心を、衣装の儀式への関心に摩り替えて理解したものだと思われる。それは、季節ごとの儀式で表現されるような、特に生と死を表す仮面で表現される共同体での季節の移り変わりを祝う儀式を、女性達が季節ごとそして一日の時刻に合わせて衣装を着替える儀式として解釈することで生まれた芸術と考える。ワイルドが編集した女性雑誌を通して、ヴィクトリア時代の服飾の流行とワイルドの表面の美学としての衣装の繋がりを考察する。

ウィリアム・モリスの中世主義受容

神戸大学大学院 清川 祥恵

中世主義 (medievalism) とは、ヴィクトリア時代に最高潮に達した、中世の社会・文化・倫理観を理想化し、復興しようとする潮流である。19 世紀後半に、主に芸術家および社会主義者として活動したウィリアム・モリス (William Morris, 1834-96) は、とりわけジョン・ラスキンから大きな影響を受け、芸術の再興・復権をめざして中世を理想化した人物として知られている。

しかしながら、モリスの中世主義は、キリスト教信仰 (ひいてはカトリシズム) を中心理念として掲げた中世主義とは異なったものであり、その点で、ラスキンを含む彼以前および同世代の中世主義者とは、一線を画しているといえる。本発表は、モリスが彼以前の中世主義者たちの思想をどのように受容し、自身の理想に汲み入れたのかという点について、モリス自身の文学作品における「中世」との係わり合いから、明らかにしようとするものである。

ジョン・ラスキンの女子教育——マーガレット・ベルのウィニントン・ホールを中心に

日本女子大学講師 升井 裕子

ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) は、著作『胡麻と百合』の第二講「王妃の庭園について」において「女性の王妃らしい力」を巡り、独自の女性観や女子教育論を展開する。その中で、女性は「家庭の神々」として家庭の平穏を守ることが期待された。さらにラスキンは、国家に対しても家庭に対するのと同様の役割を女性に求め、当時の産業化が生み出した社会悪を一掃し国家の美德を回復する為には女性の役割が不可欠であると述べる。ラスキンは、その役割の一端を担う女子教育への関心を高め、実際に女子教育の現場との関わりを持つようになったと考えられる。本発表では、マーガレット・ベルが 1851 年に設立した女子教育機関ウィニントン・ホールへのラスキンの支援を一例に「王妃の庭園について」の中で言及されるラスキンの女子教育論を考察する。

【特別講演】

ヴィクトリア朝建築の詩学——桂冠詩人が守った街並み

名古屋大学准教授 大石 和欣

ヴィクトリア朝期はネオ・ゴシック建築が謳歌した時代である。18 世紀後半に興隆したゴシック復興の動きは建築様式にも及び、19 世紀の半ばを過ぎる頃になるとイギリス各地の街並みは多種多様なネオ・ゴシック様式に染まることになる。リーズ市庁舎、ベッドフォード・パークの郊外住宅、ジョージ・ギルバート・スコットの設計したセント・パンクラス駅前の旧ミッドランド・ホテルなど、ネオ・ゴシックなくしてヴィクトリア朝の都市景観は語れない。

しかし、上述の建築物が残存しているのは、ひとえに一人の桂冠詩人のおかげである。ジョン・ベッチャマンである。とくに第二次世界大戦後、都市の再開発が進められていく中で、ネオ・ゴシック建築物は時

代遅れで悪趣味なものとして次々に破壊されていった。それに対して敢然と立ち上がり、その美と価値を訴えたのがベッチャマンであった。エイサ・ブリッグズとともに設立したヴィクトリア朝協会がヴィクトリア朝研究に与えた影響も無視できない。

本発表では、ベッチャマンの建築の詩学をヴィクトリア朝文化研究の枠組みの中で解きほぐすことで、ヴィクトリア朝建築物の文学的・文化的意義を再考したい。

【シンポジウム】

「ヴィクトリア朝イギリスと開化期日本——交流の諸相」

司会 松村昌家（大手前大学名誉教授）

1862年の遣欧使節団の訪英のスケジュールは、第2回ロンドン万博開催の日程に合わせて組まれていた。使節団代表のこの万博開会式典への公式参加は、文字どおり日英交流の幕開けであったのである。その後における急速な日本の近代化は、ヴィクトリア朝イギリスとの交流を通じてなし遂げられたとって過言ではない。顧みて本学会としても議論を起こすべき重要課題が山積しているなかで、本シンポジウムでは特に「開化期日本」の観点から、4つの論題を提供することにした。各講師と論題、ならびにその要旨は、次のとおり。

松村昌家「アームストロング砲と幕末・維新」

幕末使節団のイギリス見聞の中で最もインパクトが大きかったのはアームストロング砲であった。

それから数年後にそれは日本の歴史を大きく動かすことになる。歴史小説における記述なども視野に入れて、この新兵器出現の意義を検証する。

山口恵里子「ヴィクトリア朝英国における Japanism と medievalism ——明治日本のラファエル前派受容と “Japan for Japanese” 運動との関連から」

ラファエル前派のロセッティが浮世絵を蒐集したように、ヴィクトリア朝のジャパニズムは中世主義から連なるものである。明治日本でラファエル前派は西洋芸術の手本となる一方、彼等の中世主義が日本の独自性を重視した反西洋化運動の模範になった。こうした「中世」が媒介した日英の文化接触を考察する。

橋本順光「大英帝国の航路からみた横浜居留地——人種衝突と美術交流のあいだで」

横浜居留地は、いわば東回りの英国と西回りの米国が地球を半周して出会った場所であった。本発表では、そうした文脈から Lady Franklin や Dilke などの世界旅行に注目し、適宜、Hearn を参照することで、居留地についての言説をジャポニスムや人種衝突の系譜のなかに位置づけたいと思う。

福田真人「結核の世紀、19世紀の日英」

ヴィクトリア時代の青白さ (paleness) は、時代の色だった。それは、結核という病が世界を覆っていたからである。その時代の病気の諸相を垣間見る。

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

(The Victorian Studies Society of Japan)

事務局：☎156-8550

東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部英文学研究室内

Tel/Fax: 03-5317-9709/9336

E-mail: victoria@chs.nihon-u.ac.jp

http://wwwsoc.nii.ac.jp/victoria/